

◇拠点形成概要

機 関 名	慶應義塾大学、独立行政法人理化学研究所、ケンブリッジ大学、ウィーン大学、ビーレフェルト大学、エコール・ノルマル・シュペリユール、エコール・ポリテクニック
拠点のプログラム名称	論理と感性の先端的教育研究拠点形成
中核となる専攻等名	社会学研究科心理学専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 渡辺 茂 教授 外 26 名
[拠点形成の目的] 本拠点の目的は「論理と感性」の先端的教育研究を海外の有力な教育研究機関と連携して世界最高水準で行う拠点を形成することである。グローバルCOEでは、21世紀COEでの評価が高く、人文学的研究と実験的方法の融合が効果的に機能した分野の課題として「論理と感性」に特化した先端的教育研究を行う。ヒトの判断には論理的アルゴリズムによる判断と感性による直感的判断があり、両者の関係は認識論の古くからの課題であるが近年の認知科学、神経科学の発展は、判断における論理と感性が独立した過程ではなく、ひとつの系として、ある時は相互補完的に、ある時は対立的に働いていることを示しつつある。論理や感性のプロセスは必ずしも意識化できる過程ではなく、脳科学的アプローチが必須であり、言語や文化による制約も大きい。本グローバルCOE拠点では、判断における論理と感性の統合を、最も基礎にある生物学的レベルから文化レベルまで、総合的に理解しようとする。具体的には、1) 論理と感性の生物学的基礎、2) 論理と感性の遺伝と発達的变化、3) 認知・言語と論理・感性の関係、4) 哲学・美学における論理と感性およびその文化的制約、5) 論理と感性の論理学的表現、という5点を明らかにする。そして、その研究に参加することを大学院の履修科目とし、複数指導体制の教育を通じて実験科学的技法をもった人文研究者、人文科学的な知性を身につけた実験研究者を育成し、国際社会に送り出す。心の問題は現代社会におけるもっとも緊急に解決しなければならない課題のひとつであり、本拠点はそのような問題の解明に対応できる深い知識、幅広い視野、国際レベルの先端的技术を併せ持った研究者を育成するものである。 また、論理と感性の関係について、神経レベルから文化レベルまでの総合的教育研究を行うことが本拠点の特色であり、その研究への参加を通じて人文科学的知性と実験科学的方法を併せ持つ国際的研究者を育成することを目的とする。そのため、学問領域、研究科をこえた教育研究拠点を形成する。さらに、国際教育研究プログラム、研究発信支援プログラムにより、若手研究者の国際的研究発信を促進する。現代の心に関する問題の多くは論理と感性の相克に起因し、これらの問題に対処できる広い知識・技術をもった研究者の育成は急務である。	
[拠点形成計画及び進捗状況の概要] 本拠点は論理と感性の教育研究の中心に「教育研究プログラム」を設置し、大学院との密接な連携のもとに教育研究を行い、「教育研究施設」と「研究成果発信プログラム」などがこの教育研究を支える。 「教育研究プログラム」: 脳と進化、遺伝と発達、言語と認知、哲学・文化人類学、論理・情報の5チームを設置し、拠点リーダーのもとに論理と感性についての先端的教育研究を展開する。大学院生はこのプログラムを大学院科目として履修し、研究の実践を通じて分野融合的研究のすすめ方を習得する。平成19年度は10名、平成20年度は9名が修了証を授与された。 「教育研究施設」: 教育研究の環境を物理的に支えるのが「教育研究施設」である。本拠点は人文科学の拠点であるが、実験科学との融合的教育研究のため、いくつかの実験施設を設置した。MRI実験施設は平成20年10月から稼働を始め、平成21年3月現在20プロジェクトが実際に利用している。発達研究施設ではNIRS, TOBIなど装備した。また、医学部総合医科学研究棟内にマーモセット実験室、つくば市に野外実験施設を設置した。 「研究成果発信プログラム」: 若手研究者の国外での研究発表を支援するもので、論文作成の指導から海外の第一線で活動するための戦略的指導まで行う。これを利用して51篇の英文論文が作成された。 「国内連携」: 理化学研究所・脳科学総合研究センターの「象徴概念発達研究」チームと連携し、マーモセット実験室を運営し、その成果があがっている。また毎年理化学研究所でも学生が実験を行っている。 「海外連携」: 本拠点の教育研究に効果的に連携できる先端的教育研究機関として現在7つの機関と提携関係を締結している。2008年には南フロリダ大学、嘉泉医科大学と新たに連携協定を結んだ。現在マッギル大学との連携作業中で、最終的に15拠点程度に海外連携拠点を増やす。 「国際教育研究プログラム」: 上記の海外連携拠点を中心に若手研究者が共同研究や発表を行うもので、Keio-Cambridge Joint Seminarを英国で、Keio-Gachon Joint Seminarを韓国で、それぞれ定期的に開催している。また、海外での国際会議などへの若手研究者の派遣も積極的に行っている。 「広報」: 年4回のニューズレターの発行、年1回の英文論文集CARLS Series of Study on Logic and Sensibilityの発行、英文単行本の発行以外に一般シンポジウム、プレスリリースなどを行っている。 「ネットワーク形成」: 学内の医学研究科、システムデザイン・マネジメント研究科のグローバルCOE拠点とネットワークを形成し、「人間知性研究センター」を形成した。さらに、他大学の心に関するGCOE拠点と「心に関するグローバルCOEネットワーク」を構築し、全日本の心に関する教育研究ネットワークを形成するため、平成21年の日本心理学会大会で共催シンポジウムを行う。 「若手研究者の雇用と経済支援」: 現在、特別研究准教授5名、特別研究助教5名、研究員13名を雇用しているが、本拠点では最終的に年間40名程度を雇用する。 「外部評価委員会」: 拠点外の委員からなる評価委員会を設置し、教育研究の内容から運営まで幅広い評価・助言を求めるもので、平成20年度に書面およびヒアリングによる外部評価を行った。その結果、順調にプログラムが進行しているという評価を得た。	

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、大学の基本構想を推進する国際的教育研究拠点として、塾長を中心としたマネジメント体制の下で重点的取組みが行われ、研究施設、人的・経済的基盤も整えられており、評価できる。

拠点形成全体については、人文科学的知性と実験科学的方法を併せ持つ国際的研究者を養成する分野融合型教育研究の国際拠点形成のため、適切なマネジメント体制を整備し、国内外の連携機関との間で活発な研究活動を展開するなど、精力的に事業推進に取り組んでおり、評価できる。

人材育成面については、5つの教育研究プロジェクトに対応する共通履修科目を融合教育の核とし、若手研究者養成の多様な講座を開催するなど、教育研究のインフラ基盤を整えており、十分な成果が期待される。また、多くの国内外の連携拠点との教育研究活動も活発に行われており、若手研究者の育成に大きな効果を上げていると評価できる。

研究活動面については、論理と感性の関係性の解明という研究目的を達成するために、神経レベルから文化レベルまで多様な研究が進められ、大きな成果をあげており、また、若手研究者を取込んだ海外連携拠点との共同研究は、若手研究者による世界的広がりのある研究の発展に十分寄与していると、評価できる。

補助金の適切かつ効果的使用については、グローバルCOEプログラムの限られた予算配分の中で、若手研究者の育成と研究を推進するため、高額研究機器の導入にレンタルを採用するなどの工夫を凝らすことにより、教育研究事業を効果的に達成していると評価できる。

留意事項への対応については、「高額研究機器の導入」について、レンタルという現実的対応によって実現し、また、「融合的研究のできる若手研究者の育成」についても適切な指導体制が整えられており、評価できる。

今後の展望については、分野融合型研究の世界的教育研究拠点として順調に進捗しており、今後も引き続き努力されることが期待される。また、本拠点がハブとなり、国内外の研究ネットワークの連携が形成されるならば、我が国の科学技術発展に多大な貢献をするものと期待される。